

世界の人とふれあいタイム

平成22年2月21日実施

今回のゲストは、エドワード・トゥリプロヴィッチ・片山さん。クロアチア人の父親と日本人の母親を持つフランス・パリ生まれの青年。これまで、クロアチア(13年)、フランス(11年)、カナダ(1年半)、日本(7年)の4カ国に滞在している。お話はクロアチア語で“ドバルダン”(dobar dan)、日本語の“こんにちは!”で始まり、自己紹介の中には、両親が結婚当初、クロアチア語・ドイツ語を話すお父さんとフランス語・英語・日本語を話すお母さんの間に共通語がないため、二人がけんかをする時には辞書を使っていたとの微笑ましいエピソードも紹介された。エドワードさんは、2005年の愛知万博開催時にクロアチアのパビリオン設営に携わり、日本とクロアチア両国を結ぶ架け橋となる仕事を経験、2008年1月に東京のクロアチア政府観光局開設時、初代日本代表に抜擢された。クロアチア紹介の最初は約15分のDVD、美しい映像は格別、正に“百聞は一見に如かず”言葉には言いつくせない素晴らしい！国土は北海道の約70%、その中に7つのユネスコ世界遺産が登録されていること、特にアドリア海の真珠と謳われる美しい景色や数々の国立公園・自然公園等がある。現在、産業全体の約2割が観光業で、年間観光客数は1,000万人以上、日本人観光客も2007年以降に鰻上りで増加、特に東京にクロアチア政府観光局を開設後の2009年には163,400人に達した。また長い歴史も説明され、子供の頃の社会主義時代には食料品が自由に手に入らないこともあり、地方の村で豚一匹を買い、その豚を食料にするために家族皆で協力して、ハムやソーセージなど保存食1年分を作り大切に食べたことが懐かしい思い出。今はクロアチア産ワインが世界中で高い評価を得ており、トリュフやオリーブも品質がよく、自慢の生産物となっているとのこと。

クロアチア旅行で体験して欲しいのは、オープンでフレンドリーな国民性と人間好きなこと、日々の暮らしで時間がゆっくり流れていること。

クロアチアの魅力を出席者に語るエドワードさん



Q & A は、クロアチア旅行の経験者と未経験者間で観光談義が続き、エドワードさんからも色々アドバイスが出ました。私も是非一度クロアチアに行ってみたい気持ちです!!

報告：世界の人とふれあいタイム委員 青木美佐子

研修

**前田節子氏による
「日常生活でつかえるカウンセリング・スキル、
カウンセリング・マインド」の
研修会に参加して**

前田 満寿美

2009年12月20日、講師の前田節子氏は、通訳を長年された経験、その後イギリスでのカウンセリングの勉強を含め、多様な文化に接した体験を土台に、日常生活でコミュニケーションを工夫する方法をワークショップ形式で学ぶ機会をつくっていただきました。

自己紹介をして、相手に代わって6人に他己紹介することから始まりました。記憶せねばと緊張する作業でしたが、次の話を聴きあうワークとともに、他人の立場になりきってみることで相手に共感することの大切さやむずかしさを実感しました。



説得力のある内容に、うなづく参加者

コミュニケーションには、「知 think」の部分(知識、分析など)と、「感 feel」の部分(感情、共感など)があり、その両方を常に意識しておく大切さを学びました。特に男性は、「知」重視のコミュニケーションに慣れているけれども、「感」に注意を向けて聴き、「感」で返すと人のかかわりがスムーズになると強調されました。たとえば、女性が「疲れた(感)」と言ったときに、男性は往々にして、「じゃあ、出前をとれば(知)」と問題解決志向の応答をしがちですが、わかってもらえたと思われにくい。疲れている気持ちに対しては「いつもごろうさん」のような「感」で返すと疲れがすっとほぐれていく、と。また、喜怒哀楽、恐れ、嫉妬、不安など、どんな感情もすべて大切に交流してこそ、お互いにわかり合え、生活が豊かになることもわかりました。

通訳場面への応用としては、内容をよく吟味して「知」のメッセージなら、主観を交えずにしっかり全部訳す。「感」のメッセージには気持ちを整理するお手伝いをする。五感で聴く。相手の動作をさりげなく真似てみる。相談内容が複雑なときは、「何が一番困っているの?」とたずねてみる。暴力の心配がある時は、利き手が届きにくい側に立つなど数々のヒントをいただきました。ほんの一部しか紹介できませんが、大変有意義な研修でした。